

会わず話さず外に出ず

東京・下町の都営団地に一人で暮らす安田武夫さん(80、仮名)の生活は、毎日がほぼ同じことの繰り返しだ。

午前4時に起床し、公園で約1時間ウォーキング。朝食をとって掃除をした後、自転車で近所の川に釣りに行く。昼に帰宅した後は、するることがない。昼寝をしてテレビを見て、日が暮れるのを待つ。

生活ドキュメント

しほむ 老後

⑥

午後9時ごろ就寝。人と接するのは、乳酸菌飲料の配達員と買い物先の店員ぐらいだ。

「張り合いがない。寂しくて、昔の写真ばかり見えています」と、4年前に病死した妻の遺影を見やっていた。妻と地域の集まりに出ることもあったが、今は近所付き合いはない。困るのは食事。「お勝手に入ったことがなく、煮物の作



東京・葛飾区の民間アパートに1人で暮らす87歳の男性。「緊急時に駆けつけてくれる人はいない」という

り方がわからない」。糖尿病で栄養バランスが気になるが、スーパーの特売品や100円ショップを利用し、総菜やパンを買ってはばかりだ。機械の部品工場に勤め、独立して下請けをしながら10年余り前まで仕事を続けた。現在の収入は年金が月9万6000円。うち3万円は「葬式代や入院費」に充てようと貯金し、生活費を切り詰める。離れて暮らす息子がたまに訪れるが、自分の生活で手いっぱいなのは分かっている。

* *

「生活に困窮する単身高齢者ほど社会的に孤立している。特に男性にその傾向が強い」と、明治学院大教授(地域福祉論)の河合さん(仮名)は指摘する。河合さんは昨年度、東京都葛飾区に住む70歳以上の単身高齢者約900人を対象に、生活状況の調査を同区社会福祉協議会と実施した。調査では、病気など緊急時の支援者が「いない」と答えた男性は37%で、16%だった女性の倍以上だった。自分の経済状況を「苦しい」と答えた高齢者は、支援者がいない

緊急時の支援者欠く単身男性

人の35%に達し、支援者がいる人の25%を上回った。男性は総じて収入が高いが、生活が「苦しい」と感じる人は男女とも約3割と同じだった。

「社会とのつながりが少ないことが、生活不安を増大させている。行政や福祉関係者ももっと介入できる仕組みが必要では」と河合さんは見解を。孤立した高齢者は必要な情報を入手できず、配食や緊急通報サービスがあることすら知らない人が多いという。

* *

東京都新宿区の都営「戸山団地」。65歳以上の高齢者が過半数を占め、ここでも単身男性の孤立は深刻な問題だ。「男性は人との付き合いがおっくうになりがち。新しい環境で知り合いを作るのは大変なことだ」と、団地の住民で高齢者の支援活動などを行うNPO法人「人と人をつなぐ会」代表の本庄有由さん

(7)は顔を曇らせる。

建て替えになったばかりの団地からの転居者が増えており、最近も90歳の男性が単身で越してきた。身の回り品をボストンバッグ一つに詰めてきた80歳の男性を見かね、同じ棟の人が鍋や布団を譲ったこともあった。「外に出ると余計な出費をしてしまう」と、週1回しか外出しない高齢男性もいるという。

こうした状況を打開しようとして、「人と人をつなぐ会」では3月、「おやじの集い」を開いた。男性約20人が参加し、元中華料理店主の住民から「メンとギョーザの作り方を教わり、ビールも飲んで好評だった。今月は団地内で野菜などの販売会を開き、来月また「集い」を開く。「孤立する人たちを、何とか部屋から引っ張り出したい」。本庄さんの試みは、これからも続く。

妻は「限界」

50歳目前のサラリーマン。5年前からうつ病が始まりましたが、今は薬でかなり回復してきた感じですが、上司の心遣いもあり、仕事も普通になっています。

先日、妻の肩をもんであげようと手を触れた瞬間、妻は顔を曇らせて、限界。信頼感も愛情もなくなり、家族にそんな風に見えるわけていたなんて、かなりショックでした。自殺も離婚も考えましたが、気が弱いからできません。汚名返上のため、可成り努力

くらしの家庭

は同会(03・5423・4511)への会のホームページ(<http://www.aarjapan.gr.jp>)からも申し込める。

◇「生活ドキュメント しほむ老後」へのご意見、ご感想をお寄せ下さい。手紙(〒100・8055読売新聞東京本社生活情報部「しほむ老後」係)、またはファクス(03・3217・9919)、メール(kurashi@yomiuri.com)でお願いします。